～愛と平和への祈りをこめて Vol.13～

Maki Mori

Soprano Recital 2023

森 麻季 ソプラノ・リサイタル

ピアノ：山岸 茂人

Shigeto Yamagishi, *Piano*

ワシントン・ナショナル・オペラデビュー25周年～

感謝をこめて

2023年9月10日(日)14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

2:00p.m., Sunday, September 10, 2023 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

協力：エイベックス・クラシックス

人のいるところには
夢がいる。
JAPAN ARTS

時をみつめて

「愛と平和への祈りをこめて」公演によせる思い —— 森 麻季

© Yuji Hori

「愛と平和への祈りをこめて」と題して始めさせて頂いたこの公演は、今回で13回目となり、私の人生の中の大切な公演として歴史を刻みつつあります。

私が大学院を修了し、文化庁のオペラ研修所を経て、いよいよ留学！という時には、今の様にインターネットもなく、情報がほとんど手探りで、とても不便でした。私は最初にイタリアへ留学したのですが、その頃は学校の入学試験のことも、向こうでの生活のことも正しい情報を得るのがとても難しく、留学してからも大変なことばかりでした。外国に暮らすということがこれほど厳しいものなのだとも痛感しましたし、日本で、親元でぬくぬくと暮らしていた毎日とは全く違う生活になりました。今ならば、ネットを通して家族と会話することも簡単ですが、以前は国際電話がかけられるプリペイドカートを買って、ほんの数分急いで声を交わし、それも高価でいつもはできないからほとんどはファックスでやりとりして…と今では懐かしいほどです。

ヨーロッパの国立音楽大学には、アジアを含め多くの外国人が押し寄せ、国費で賄う国立音楽大学に自国の生徒が入りにくい状態で、外国人を少しでも減らすために、私が通っていた頃のミラノのヴェルディ国立音楽院では毎週手厳しい語学の試験や、外国人が苦手な試験、面接などが課されたりしました。国際コンクールを受けに行っても、アジア勢、アメリカ勢も多く、日本人は同じアジア人の中でも韓国や中国の歌手たちには体格も声の強さも及ばず、ましてやアメリカや他の国々の歌手たちはもっと体格も声も容姿も、よりオペラに相応しい方ばかりで、さらにヨーロッパ勢は母国の文化や言葉、自然に紡がれる芸術性などを持ち合わせていて、国際的に戦うということは本当に大変なことなのだと思うばかりでした。

イタリアの次にはドイツへ留学しましたが、ちょうど激しい寒波の頃で、ミュンヘンはドイツの南とはいえ、夏もほとんど暑くならず、長く厳しい冬が続き、雪、大雪、雪嵐が繰り返されて、心も体も凍てつく毎日でした。東京に育った私にはミラノもミュンヘンも寒さが堪えて精神的にも結構やられました。そしてアジア人への差別なども重なり、小さな心ない言動でも、簡単に心が押しつぶされたことも覚えています。そんな20代後半に差し掛かる頃の私は、なんでこんなに辛い気持ちでここにいるのだろうと、よく教会に行って座り込み、心の拠り所が必要なこともわかり、後にキリスト教徒にもなりました。将来に希望を持てるわけでもなく、仕事が決まっているわけでもなく、ただコンクールを受けに行ったり、オーディションに行ったりと未来への扉を叩き続ける日々でした。不安がいっぱいで、がんばったところで周りにはもっと素晴らしい、望まれた人たちがいっぱい居て、私なんか必要ない様な気持ちが大きくて…。かなり後ろ向きですよね…。(笑)

それでも歌を続けよう、勉強を続けようと思ったのは、やっぱり歌が大好きだからでした。少しでも上手になって、憧れの歌手の様に歌いたい、そんな気持ちがいつも、今もずっと続いています。1998年にワシントン・ナショナル・オペラに日本人としてはじめて出演してから、今年25周年の節目を迎えます。私の20代後半は今やずっと昔々のことですが、最近の日本人の国際的な活躍は本当に目覚ましく、オリンピックにしても、先日のWBCにしても、世界の強豪を相手に引けを取らず、日本人だから、なんて後ろ向きにも全くならず、ましてや世界を圧倒できる結果を残せるなんて、本当に心から賞賛するばかりです！

今回は、これまでの時をみつめて改めて初心にかえり、国際的に活躍する若者たちの努力を見習い、かつての国際コンクールや今までの演奏活動の中で大切に歌ってきた曲も取り上げ(かなりの挑戦ですが…！)2023年の周年にあたる作曲家の作品を中心としたプログラムで、今できる最善を尽くせる様、一生懸命にがんばりたいと思っています！

そして何よりも、こうして平和があるからこそ、皆様にご来場頂けること、演奏活動ができることを心に刻み、今尚戦争が続き、苦しんでおられる方々や、震災に苦しむ方々に心を寄せて、ご来場くださる皆様の心にも、さらに穏やかな平和が訪れることを祈りながら、心をこめて演奏いたします。

Program

Maki Mori
Soprano Recital 2023

グノー(没後130年)：歌劇「ファウスト」より “宝石の歌～なんと 美しいこの姿”
Charls Gounod: Air des bijoux, “Faust”

バッハ＝グノー(没後130年)：アヴェ・マリア
Bach=Gounod: Ave Maria

レーガー(生誕150年)：マリアの子守歌
Max Reger: Mariä Wiegenlied

マスカーニ(生誕160年)：アヴェ・マリア
Pietro Mascagni: Ave Maria

ブラームス：《6つの小品》作品118 より 第2曲〈間奏曲〉(ピアノ・ソロ)
Johannes Brahms: Ⅱ. Intermezzo from “Klavierstücke Op.118”

ブラームス(生誕190年)：「ドイツ・レクイエム」より “あなた方は、今は悲しんでいます”
Johanness Brahmus: Ihr habt nun Traurigkeit, “Ein Deutsches Requiem”

ラフマニノフ(生誕150年 没後80年)：《10の前奏曲》作品23 より 第4番 (ピアノ・ソロ)
Sergei Rachmaninoff：Prelude No.4 in D major from “10 Preludes”, Op. 23”

レハール(没後75年)：喜歌劇「メリー・ウィドウ」より “ヴィリアの歌”
Franz Lehár: Vilja Song, “The Merry Widow”

ドニゼッティ(没後175年)：歌劇「シャモニーのリンダ」より “この心の光”
Gaetano Donizetti: Ah! tardai troppo..O luce di quest'anima, “Linda di Chamounix”

ラモー(生誕340年)：《新クラヴサン組曲》より〈エジプトの女〉(ピアノ・ソロ)
Jean-Philippe Rameau: L'Egyptienne from “Nouvelles suites de pièces de clavecin”

ドニゼッティ(没後175年)：歌劇「ランメルモールのルチア」より “あたりは静けさに包まれ”
Gaetano Donizetti: Regnava nel silenzio, “Lucia di Lammermoor”

チャイコフスキー(没後130年)：《四季》作品37bis より 10月〈秋の歌〉(ピアノ・ソロ)
Pyotr Il'ich Chaikovskii:Octobre: Chant d'automne from “Les saisons Op.37bis”

中田喜直(生誕100年)：さくら横ちょう
Yoshinao Nakata: Sakurayokocho

ヴァーグナー＝リスト (ヴァーグナー生誕210年 没後140年)：イゾルデの愛の死 S447 R.280 (ピアノ・ソロ)
Richard Wagner (Transcribed by Franz Liszt): Isordens Liebestod S.447 R.280

ヴェルディ(生誕210年)： 歌劇「椿姫」より “あぁ、そはかの人か”～“花から花へ”
Giuseppe Verdi: E strano!....Ah,fors'e lui....Sempre libera, “La Traviata”

Profile

森 麻季 *Maki Mori* (ソプラノ, *Soprano*)

© Yuji Hori

東京藝術大学、同大学院、文化庁オペラ研修所修了後、ミラノとミュンヘンに留学。プラシド・ドミンゴ世界オペラコンクールをはじめ、多数の国際コンクールに上位入賞。1998年ワシントン・ナショナル・オペラでアメリカ・デビュー。その後、ドレスデン国立歌劇場《ばらの騎士》、トリノ王立歌劇場《ラ・ボエーム》に出演を重ねて、国際的な評価を得る。2015年兵庫オペラ《椿姫》、2017年BCJオペラ《ポッペアの戴冠》、2020年BCJオペラ《リナルド》、2022年《椿姫》Bunkamuraシアター・オペラ・コンチェルタンテへ出演し、各紙で好評を博す。透明感のある美声と深い音楽性は各方面から絶賛され、日本を代表するオペラ歌手として常に注目をあびる。今夏、ロンドンにてBBCプロムスにデビュー。2022年より国立音楽大学客員教授。ワシントン・アワード、五島記念文化賞、出光音楽賞、ホテルオークラ賞受賞。

Twitter: https://twitter.com/makimori_sop
Facebook: https://www.facebook.com/MakiMori.sop/
Instagram: https://www.instagram.com/makimori_sop/

山岸茂人 *Shigeto Yamagishi* (ピアノ, *Piano*)

© 横井明彦

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、同大学大学院（音楽学専攻）修了。在学中に安宅賞受賞。古典から近代にわたるイタリア歌曲を嶺貞子氏に、ドイツ歌曲を佐々木成子、ライナー・ホフマン各氏より学ぶ。ピアノを川口恒子、渡辺健二、高出紘子の諸氏に、また、音楽学を船山隆、本田脩の各氏に師事。声楽の伴奏者としては演奏家から常に深く信頼され、これまで著名な歌手と数多く共演を重ねる。現在、東京藝術大学声楽科伴奏助手、二期会イタリア歌曲研究会ピアニスト。

Program Notes　柿沼 唯（作曲家）

Maki Mori
Soprano Recital 2023

グノー（1818－1893）：歌劇「ファウスト」より “宝石の歌～なんと 美しいこの姿”

グノーのオペラの中で今日でも上演されるものは決して多くないが、ゲーテの名高い詩劇に基づく歌劇「ファウスト」は広く知られ、フランス・オペラの代表傑作にも数えられている。この“宝石の歌”は、悪魔と契約して青春を取り戻したファウスト博士が恋に落ちる女性マルグリートが歌う、全曲中屈指の名曲。悪魔メフィストフェレスの計らいによる思わぬ宝石箱の贈り物に我を忘れて喜び、その娘心を絢爛たる声にのせて歌う。「ああ、この鏡に映る自分の美しい姿を見て、喜びを覚えるわ！あなたなの、マルグリート？いいえ、それはもうあなたではない、その顔は王の娘の顔。通り過ぎる誰もがひれ伏すわ！」。

バッハ＝グノー（1818－1893）：アヴェ・マリア

天使祝詞ともいわれる聖母讃歌「アヴェ・マリア」は、古来多くの作曲家によって曲がつけられてきたが、このバッハ／グノーの＜アヴェ・マリア＞ほど親しまれているものはないだろう。グノーは教会オルガニストを務めていたこともあって教会音楽を多数残しているが、バッハの＜平均律クラヴィーア曲集＞第1巻第1曲の前奏曲をそのまま伴奏としたこの曲はもともと、ヴァイオリンまたはチェロのための＜瞑想曲＞として1853年に書かれたものである。グノーはその3年後、この旋律に「アヴェ・マリア」の歌詞をつけ、今日の形となった。

レーガー（1873-1916）：マリアの子守歌

オルガン奏者でもあったドイツの作曲家マックス・レーガーは、あらゆるジャンルに多くの作品を残したが、宗教曲も多い。60曲からなる「素朴な歌」Op.76に収められた＜マリアの子守歌＞は、レーガーのもっとも有名な歌曲で、バラが咲く初夏の情景の中で御子イエスをあやすマリアを歌う。メロディは古い民謡に基づいている。揺りかごの動きを想わせる伴奏に乗って「マリア様はバラの茂みの中にお座りになって御子イエスをあやしておられます」と歌い出され、「おやすみなさい、御子よ、愛しきお方、おやすみなさい！」と歌い上げる。

マスカーニ（1863－1945）：アヴェ・マリア

近年多くの歌手たちによって歌われ、広く親しまれているこのマスカーニの＜アヴェ・マリア＞は、彼のオペラ代表作＜カヴァレリア・ルスティカーナ＞の中の有名な「間奏曲」のメロディーによる、清澄さと宗教的雰囲気を湛える名曲。静かに歌い出され、最後は「アヴェ・マリア、私を悲しみのえじきにしないで下さい」と歌い上げられる。

ブラームス(1833-1897):
「ドイツ・レクイエム」より “あなた方は、今は悲しんでいます”

「ドイツ・レクイエム」は、若きブラームスが10年以上の歳月を費やして1868年に完成した、オーケストラと合唱およびソプラノとバリトンの独唱による作品。通常のレクイエムのようにラテン語の典礼文ではなく、ブラームスがルター訳の聖書から選んだ章句で構成される。今回演奏されるのは、ソプラノ独唱によるその第5曲。「あなた方は、今は悲しんでいますけれども、私はあなた方と再会しましょう」とゆったり歌い出され、やがて転調して「私を見なさい、わずかの間の骨折り苦労で大いなる慰めを見いだしました」と歌い上げる。

レハール(1870-1948):喜歌劇「メリー・ウィドウ」より “ヴィリアの歌”

レハールならではの甘美で魅惑的な歌にあふれた、オペレッタ史上不滅の名作「メリー・ウィドウ」。“ヴィリアの歌”は、有名な“メリーウィドウ・ワルツ”とともにこのオペレッタを代表する一曲だ。恋するハンナが森の精ヴィリアの物語を歌うこの曲は、レハールの最も美しいメロディーとして知られている。「昔、森にヴィリアという妖精がいて、若い狩人が一目惚れ」と歌い出され、「ヴィリア、おお、ヴィリア、森の精。抱きしめて、愛を我に!」のところは、誰もが思わず口ずさみたくなるだろう。

ドニゼッティ(1797−1848):歌劇「シャモニーのリンダ」より “この心の光”

フランス領アルプスの町シャモニーを舞台に、村娘リンダと貧しい画家カルロの恋物語を牧歌的ロマンティシズムで綴る「シャモニーのリンダ」は、ドニゼッティのオペラの中では上演される機会のきわめて稀な作品だが、このアリアだけは演奏会でしばしば取り上げられる。カルロとのデートに出掛けたが行き違いになって帰ってきたリンダが、恋する乙女心を歌う一曲である。「ああ!遅すぎた。愛するカルロの姿は見られなかった」と歌い出される情感豊かなレチタティーヴォに続いて、アリアは軽やかなテンポとなり、「おお、この心の光、喜び、愛、命。私たちの運命はきっと地上と天国で結ばれる。私の胸にいらっしゃい、心はあなたが恋しくて待ちこがれ、あなたのためだけに生きていく」と歌い上げる。

ドニゼッティ(1797−1848):
歌劇「ランメルモールのルチア」より “あたりは静けさに包まれ”

ドニゼッティのオペラ・セリアの代表作「ランメルモールのルチア」は、当時大流行した＜狂乱オペラ＞屈指の傑作。物語は、ランメルモールの領主エンリーコが妹ルチアを政略結婚に使うというところから始まる。しかしルチアには恋人がいて、事もあろうにそれは兄の宿敵エドガルドであった。

“あたりは静けさに包まれ”は第1幕、泉のほとりでエドガルドを待つルチアが、泉にまつわる不気味な物語を侍女に聴かせる場面で歌われる。のちの運命の予告ともいえる場面だが、不気味さよりはむしろメロディの美しさが際立つ佳曲である。

中田喜直(1923−2000):さくら横ちょう

数多くの愛唱歌や童謡の名作で知られる中田喜直の、もっとも美しい歌曲のひとつ＜さくら横ちょう＞(加藤周一作詞)は、「マチネ・ポエティクによる4つの歌曲」の一曲として1950年に発表された。春の夜の幻想的な桜の情景と恋のはかなさを、心憎いばかりに見事に歌い込めた名歌である。

ヴェルディ(1813−1901):
歌劇「椿姫」より “あぁ、そはかの人か”〜“花から花へ”

ヴェルディの代名詞といえるほどの人気を誇るオペラ「椿姫」。華やかなパリの社交界で真実の恋に生きた女性の悲劇を描いたこのオペラ第1幕の名高いアリア、“ああ、そはかの人か”〜“花から花へ”は、高級娼婦として歓楽に憂き身をやつしているヴィオレッタが、純情な青年アルフレードに心を打たれ、真実の恋に目覚める場面で歌われる。「不思議だわ!心にあの言葉が刻み込まれてしまった。ああ、私の知らなかった愛し愛される喜び」と心ときめかせた後で、「どうかしているわ!空しい妄想だわ」と娼婦の自分に戻り、「いつも自由に楽しみにうつつを抜かすのだわ。陽気に、いつも新しい歓びに思いを馳せるのよ」と歌い上げる。初めて真の愛を知った喜びの一方で、その感情に戸惑うヴィオレッタの複雑な心境が見事に表現されている。